

〔編集後記〕

論文十二編、翻訳・訳注六編の研究成果が寄せられ、平成二十一年刊行『人間文化』第二十四号も、充実した内容となった。創刊号からの目次タイトルを総覧すると、約四半世紀にわたる数々の学術研究の重みを実感すると共に、「人間文化」と総括される紀要名のもとに、いかに多様な研究領域、さまざまな切り口、視点、方法による考察が提示されてきたかが見て取れる。個々の執筆者のみならず、多くの内外の研究者、読者が毎年、本誌の刊行を待ち望んでいることが想定され、その需要層の厚さが推し量られる。一方、本誌は、人間文化研究所の活動と連動しつつ、変革や創意を加えながら深化してきたわけだが、共同プロジェクトや共通テーマに基づく諸論攷の掲載もその大きな特色である。一つのテーマのもとに持続された研究成果を、継続的に公開してゆく〈場〉としての位置付けがあらためて認識される。多様性と継続性は、特定の研究会誌や学会誌との差異を明確にする本誌の大きな利点であろう。最初の共通テーマ「異文化接触の諸相」を掲げた十八号の編集後記で、現所長の林淳教授が「人間文化研究所は、改革の最中」にあり、「多数の「個人研究」を相互に交差させて、所員の間の知的交流を活性化」することと、「個々の所員によるたゆまぬ地道な研鑽とその持続力」の重要性を述べておられるが、それは今後、『人間文化』の號を重ねてゆく上でも、不変の事項として肝に銘じていかねばならない。当機関が所員相互の学問的交流の場になると共に、愛知学院大学の人文系の質の高い学問・研究を外に向けて発信してゆく、その確固たる拠点になることを願ってやまない。（川名淳子 記）

人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要 第24号

平成21年9月10日印刷  
平成21年9月20日発行

(非売品)

編集兼発行者  
愛知学院大学人間文化研究所長 林 淳

〒470-0195  
愛知県日進市岩崎町阿良池12番地  
電話 0561 (73) 1111 (内線1875番)

印刷所 株式会社 あるむ